

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	長沼 千夏 (ながぬま ちなつ)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学研究科 修士課程 1年
発表年月 または事業開催年月	2023年 10月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本認知・行動療法学会 第49回大会
発表者(※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	長沼 千夏, 成田めぐみ, 西中 宏吏, 嶋田 洋徳
発表題目(※学会発表の場合のみ記載)	青年期における発達性協調運動症の特徴とその自己認知が対人適応感に及ぼす影響
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>【目的】 本研究では、青年期の DCD の特徴とそれ自体に対する自己認知の適切さが対人適応感に及ぼす影響を検討することを目的とした。</p> <p>【方法】 調査対象者 4年制私立大学の大学生および大学院生 154名を対象とし、回答に漏れがない 124名 (男性: 45名, 女性: 77名, その他: 2名, 平均年齢 20.50 ± 5.50 歳) のデータを分析対象とした。 調査材料 (a) デモグラフィック項目: 性別, 生年月日 (ソフトの利用制限のため), (b) 親密度: 友人関係尺度 (岡田, 1999) を一部改変, (c) DCD 症状: 感覚+動作アセスメント (岩永, 2021) を一部改変し, 本人をよく知る友人に回答を求めた, (d) 不器用さの自己認知: 青年版現在の不器用さの自己認知尺度 (林他, 2017), (e) 対人適応感: 大学生用学校適応感尺度 (大久保・青柳, 2003) 利益相反開示: 演題発表に関連し、開示すべき COI 関係にある企業などはありません。</p> <p>【結果・考察】 DCD 症状と対応する自己認知の関連を検討するために Pearson の積率相関係数を算出した。粗大運動とその自己認知において負の相関が見られ、書字・多動性とその自己認知において弱い負の相関が見られた。また、DCD の特徴とその自己認知が対人適応感に及ぼす影響を検討するため、学校適応感を目的変数として、Step 1 では DCD 症状、Step 2 では対応する自己認知、Step 3 では DCD 症状と対応する自己認知の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、粗大運動の不器用さの得点が高い場合、粗大運動の不器用さの自己認知は学校適応感に負の関連を示した。 以上のことから、青年期において粗大運動の不器用さを有する者に対しては、その特徴への自己認知を深める介入が対人適応感を高める可能が示唆された。粗大運動の不器用さを自身の特性として理解し、その特性を踏まえたソーシャルスキルを身につけ活用することを目標とした介入を行うことによって、対人適応感を高める可能性がある。また、粗大運動以外のサブタイプに対しては、各サブタイプに対して、さまざまな要因との関連性を探索的に検討し、より適切に各サブタイプの状態像を記述する必要性、および具体的な介入方法を検討する必要があると考えられる。</p>	

※無断転載禁止